

鹿島田真希

Maki Kashimada

来た
野球部



講談社
文庫



講談社文庫

来たれ、野球部

鹿島田真希

講談社

〔著者〕鹿島田真希 1976年東京都生まれ。白百合女子大学卒業。1998年『二匹』（河出文庫）で第35回文藝賞受賞。2005年『六〇〇〇度の愛』（新潮文庫）で第18回三島由紀夫賞受賞。2007年『ピカルディーの三度』（講談社）で第29回野間文芸新人賞受賞。2008年『ゼロの王国』（講談社文庫）で第5回糸山賞受賞。2012年『冥土めぐり』（河出書房新社）で第147回芥川龍之介賞受賞。著作に『ナンバーワン・コンストラクション』（新潮社）、『一人の哀しみは世界の終わりに匹敵する』（河出文庫）、『黄金の猿』（文春文庫）、『女の庭』（河出書房新社）などがある。近著は『その暁のぬるさ』（集英社）、『暮れていく愛』（文藝春秋）、『ハルモニア』（新潮社）。

き やしりま
来たれ、野球部

かしまだ まき
鹿島田真希

© Maki Kashimada 2014

2014年3月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277787-2

目次

来たれ、野球部

解説 柴崎友香

278 7





講談社文庫

来たれ、野球部

鹿島田真希

講談社

目次

来たれ、野球部

7

解説 柴崎友香

278



来たれ、
野球部



十年前の六月二十四日。新田真実^{にったまみ}は携帯電話のアドレス帳の人物のすべてを消した。そのことにどういう意味があるのかはわからない。二十三時五分、彼女は自分の家の固定電話にコールした。母親が出たので、彼女は一言、「ごめんなさい」と言っただ。そう。その言葉は冷静で、取り乱した様子がまるでなかったらしい。そして二十時三十二分、彼女は学校の屋上から飛び降りて死んだ。靴は脱がなかったようだ。そして二日後、母親に手紙が来る。その内容は、母親に対する詫びと感謝、そして自分が飛び降りたことについては、うまく説明できない。しかし、自分はいじめに遭っていないし、友達もたくさんいた。恨んでいる人は一人もいないという内容だったようだ。

はつきりした理由がないのに、人というものは死んでしまったりするのだろうか。僕にはわからない。

しかし。

そんな学校の屋上でホームルームの時間に寝ている奴。それが僕の幼馴染の宮村奈緒だ。みやむらな

「起きろ」

僕は奈緒の額を指でたたく。

「嫌です」

奈緒は僕に背を向けて寝返りをうった。

四月。いい天気だ。青空と白い雲はくつきりと境界線を示して、雲が空より手前に存在することがはっきりとわかる。

「授業初日からこんなところにいると、また中学の時みたいに孤立するぞ」

「私は別に孤立して困ったことなんてありませんよ。修学旅行の日にみんなに写真をとってくれて言われるぐらいで。あんたこそこんなところにいるといいの？」

「僕は今、ホームルーム委員に決まったばかり。そしてホームルームに参加しない、困ったクラスメイトを探し出すために、任務を遂行中」

「ああ。そういえばあんた、新入生総代だったもんね。また首席で合格したんだ」
奈緒のそんな言葉を聞いて、大声で笑いたくなるような、走り出したくなるような

気分になる。奈緒は、首席になった僕をどう思っているのかな。

「あんた大人げないわねえ。幼稚園から一貫教育の学校の学力テストで一番とるなんて。トイレでタバコでも吸わない限り、大学まで行けるのに。たまには私みたいに全く勉強しないで普通の成績とってみなさいよ。そっちの方がよっぽど難しいと思うわよ」

「僕だつて、そんなに勉強したわけじゃないよ。部活だつてあつたし」

「そういうところが嫌味なのよねえ」

奈緒は「むかつく」と言つて目を閉じた。

今まで何度も見てきた奈緒の寝顔。見るたびに新鮮な気がする。石鹼のように滑らかで白い顔。頬にある水疱瘡みずぼうそうの傷跡。白い皮膚と対照的な漆黒の眉。あまり美容に興味のない彼女の眉は比較的整つてはいるが、外側を見れば見るほど産毛がある。

だけど。

僕は奈緒に恋をしている。

「な、奈緒」

「はい？」

「キスしていい？」

「すれば」

僕は奈緒と互いの乾いた唇の皮を合わせた。唇を合わせたあと、奈緒の「ふ」というため息が聞こえた。

「奈緒？」

「え？」

「意味わかってる？」

「意味って？」

「キスの意味。奈緒に恋してるってこと」

奈緒は起き上がって胡坐あぐらをかいて座り、「おおー」と言つて欠伸あくびをした。

「意味？ 『これからも僕の性欲の捌け口になってください。よろしくお願いします』」

「そんなことじゃないよ。もつと……」

「もつと？」

「清らかな気持ちだよ」

「どの文献に清らかな気持ちで接吻するって書いてあるの？」

ああ。駄目なんだ。僕はいつも口では奈緒を説得することができない。

でも、ここは自分の気持ちをぶつけるまでだ。

「文献？ 色々なところに書いてあるよ。小説や、心理学、精神医学の本にも」

「私、小説も心理学も精神医学も読んだことないからわからない」

「とにかく、お前が好きなんだ。いつもお前のことを考えているんだよ。お前にいつも側にいて欲しいんだ」

「それなら、もう私にキスなんてしないで」

奈緒は立ち上がり、屋上のフェンスに近づいた。

「私のことばかり考えていて欲しくないし。あんたの側にずっといたいとも思わないから」

私を好き？ きつとこいつは私をナメているのだ。入学式の日、「新入生総代、喜^き多義孝君^{たよしたか}」と呼ばれ立ち上がった時の、女子たちの熱い視線に気づかなかったのだろうか。私には聞こえていた。「この学校に首席で合格する人なんて、もつとがり勉^{べん}タイプの気持ち悪い人かと思ってた」「喜多君って野球部のエースだったんだって。勉強も部活も手を抜かないなんてすごいよねえ」など、彼を賞賛する言葉多数。中学の

時も同じ現象だったので私は慣れた。

そもそも彼が優等生デビューしたのは小学生の時。勉強というものが現れた時だ。幼稚園では両親の面接だけで、試験がなかった。しかし、小学校入学にあたり、子供たちにはIQテストが課せられた。中学校では、それが学力テストになり、当然首席合格したものが、新入生総代というものを務めるようになってから、彼はちやほやされだしたのだ。

また、小学生の頃にリトルリーグに入団したことも、彼の名誉に一役かっている。彼はもともと運動神経がよく、しかも努力家で、ピッチャーの座を射止めた。それからは、頭角を現し、エースになったのだ。

とはいえ、そんな彼にも暗い過去がある。よくあることだが、彼は幼稚園時代はいじめに遭っていた。それは、彼の家が他の家に比べて裕福でなかったことが原因である。幼い頃は正義感の強かった私は、彼をかばった。靴下に砂を入れて、いじめっ子たちをこつそりそれで殴り、後で砂を捨てて証拠を隠滅した。そんな護衛たる私と一緒にいると得であると彼は察したのだろう。我々は常に行動をとともにする、親分、子分になった。そして、外部から試験を受けて入学する子供が増え、裕福なだけのいじめっ子は不合格となり消えていった。

そんな子分たる喜多義孝が、いくら優等生デビューしたからといって、この私に恋愛感情を持つなんて。甘い。あいつは人生をナメている。私はなるべくあいつと幼馴染であることを隠して、女子たちの妬み、^{ねた}そねみの類を避けたいのだ。それなのに、あいつが私を好きだなんて。キスもセックスもしてやろう。人間には性欲というものがあるのだから。しかし恋愛感情を持つことだけは勘弁してほしい。私は、あいつの一番になつてはならないのだ。あいつは女子たちみんなのものだ。ミッキーマウスと同じなのだ。

そうだ。誰か女子とくつつけるのはどうだろう。いや、駄目だ。この考えは却下だ。あいつとつりあう女がない。容姿端麗。成績優秀。運動神経抜群。そんな女子が存在するのなら、もう既に目立っているはずだ。つまりそういう女子は存在しない、ということだ。それにクラスメイトから洩れ聞いた話によれば、あいつの女の趣味はどうやらマニアックらしい。今まで、女子の告白の数々を断ってきたのだ。例えば、某女性アイドルグループの中で、強いて言うなら誰が好きか、などという質問をされると、必ず少数派を選んだという情報を私は握っている。そもそも私に恋をしているという時点でマニアックではないか。幼い時であれ、自分より強い女に恋をするなんて、あり得るのだろうか。もしかして、マゾヒストなのだろうか。